「草原の敵」指導の試み

―積極的参加を促し、作品を豊かに想像させる授業の試み―

渡辺春美

はじめに

文学教材による授業に生徒を生き生きと取り組ませ、豊かな国語の授業を実現するにはどうすればよいのであろうか。文学教材による授業への生徒の積極的参加を促すための、一斉授業における工夫を六つ―①導入・②一読総合法を取り入れた読み・③学習目標明示・④学習課題の設定・⑤読み取りノート・⑥板書―考え、「舞姫」の授業で試み、報告した。[注1] しかし、文学教材による授業を更に充実させ、豊かにするためには、文学の特質を授業に生かすことが必要であろうと考えた。そこで、積極的参加を促す工夫に加えて、作品の世界を豊かに想像することを目指す授業を「草原の敵」で試み、考察することにした。

一、文学の特質を生かす授業の試み

文学の特質について、大江健三郎氏は、ロシア・フォルマリストたちの言葉を引きながら、それに肉付けするかたちで自己の文学論を展開している。その中で、シクロフスキーに拠る次の言葉[注2]は興味深い。

・芸術の目的は、認知つまりそれと認め知ることではなく、明視することとして、ものを感じさせることだ。

・芸術においては知覚の過程そのものが目的であり、したがってこの過程をながびかす必要があるということ

芸術の目的を述べたものであるが、これらの言葉から、虚構によって創られた現実味のある世界を生きる読者に何事かを感得させるものとしての文学の特質が浮かび上がってくる。

磯貝英夫先生は、文学の特質について、「文学はどこまでも像としてあらわれるものだが、同時に、それは、何らかの意味を開示するものとして出現する」と述べられる。[注3] さらに、像と意味との関係を、先生は、「対立的相関者」とされ、「像とのたたかい、像の刺激のないところでは、意味は、現実化することも、成長することもなく、逆に、意味の規制を受けない像は、分裂的な妄想に堕

してしまう」と、端的に述べておられる。

読解的方法による意味の追究は、像を明確にし、くっきりとさせる。そのことは、私たちの経験によっても明らかであろう。しかし、像は、意味を越えて広がっている。私たちは、像の持つ意味を追究し明確にしながら、同時に、像を広げ、深め、豊かにする読み、「認知つまりそれと認め知ることではなく、明視することとして、ものを感じさせる」読みを試みる必要があろう。

それでは、像を広げ、深め、豊かにする読みは、どのような方法によって可能なのだろうか。像を広げ、深め、豊かにするのは、想像力である。私たちは、その想像力を発揮するきっかけや発揮しやすい場を、その方法として考えねばならない。具体的には、登場人物の日記・手紙・会話の創作、全体または部分の劇化、表現読みなどの方法が有効であろう。

浮橋康彦先生は、その中の「日記」の働きについて次のように述べておられる。[注4]

人物の「日記」を書くことは、人物になりきる最も端的かつ深い体験である。作中人物は作品の世界に住み、読者（生徒）は日常の現実の中にある。その現実にある生徒が、作中人物の「日記」を書くという行為を通して、作品の世界に直接入っていくということは、虚構の方法をもって人間の心理の奥をとらえる働きにほかならない。

「人物の『日記』を書くという「虚構の方法」が、想像力を発揮させ、書くことを促し、「人物になりきる最も端的かつ深い体験」を産み、「人間の心理の奥」を感得させる。大森荘蔵氏の言うように「事物と言葉とは連れ立って立ち現れる」ならば、「登場人物の日記」という「虚構の方法」をバネにし書くということと連れ立って、像は豊かに育まれると言って良いだろう。像が私達の中に立ち現れるとき、既に私達はそこに生きているのである。浮橋先生は、日記についてのみ触れておられるが、手紙・会話の創作、劇化についても同様に有効な方法であろう。表現読みは、読むことで、ことばに命を吹き込み自分のものとすることが必要とされる。豊かな、言葉の獲得とつれだって像もまた豊かに立ち現れるのである。

このような方法による、作品を豊かに想像させる読みと読解的読みが授業において統合されるとき、文学教材による授業は、豊かに活性化されるにちがいない。

二、教材と授業のねらい

①　教材観

戦争文学を教材化する際の目安[注6]として、戦争の非人間性が鋭く描かれていること、人間性の追究がなされていること、被害者的立場とともに加害者的立場をも視野に入れていること、さらに、これらが文学として豊かに結実していることが考えられる。「草原の敵」[注7]は、これらの目安をおおむね満たす優れた戦争文学教材と言ってよい。

菊川兵長は、東洋平和の理想を信じる少年兵である。菊川は、お国のため、東洋平和のために、きれいさっぱり命を捧げるつも

りで遠く故国を離れた満洲までやって来た。しかし、菊川は、そこで思いに反する戦争の現実に直面する。菊川は、松原准尉に実敵刺殺を命ぜられ、自分が捕虜にした少年兵周を刺殺せざるをえなかった。菊川が純粋な少年兵として、描かれているが故に、その苦悩を通して、戦争の残虐性・暴力性がくっきりと浮かび上がる。最後の、菊川、長谷部、逃亡を企てた松原准尉をはじめとする守備隊全員の死は、戦争の空しさを深く実感させるものとなっている。

私達は、「草原の敵」を文学として読むことに徹することで、戦争の残虐性・暴力性とその空しさを感得し、平和を希求する心情を確かなものとして育むことができるのである。

② 授業のねらい

「一」で述べた方法論と「二」の「①」で示した教材観を受けて、「草原の敵」の授業を行うにあたり、次の三つをねらいの柱として設定した。

ア、生徒の積極的参加を促す授業。

イ、情景や心情を豊かに想像させることを目指す授業の展開。

ウ、戦争の残虐性・暴力性を実感させ、平和を希求する心情を育てること。

この小論では、大きくは、ア・ウの達成とともに、イの有効性を検討することが目的となる。

三、授業のねらいを達成するための工夫

① 一読総合法を取り入れた読み

「草原の敵」は次場面に興味・関心・期待を抱かせる工夫が随所になされている。作品の工夫を生かし、最後まで興味・関心を失わず作品に向かい、生き生きと授業に取り組むには、一読総合法を取り入れた読みを試みるのがふさわしい。

② 学習目標の明示と自己評価

学習目標を三つ設定した。授業の最後に目標に照らし自己評価させることも説明し、目標を意識化させることを試みた。目標を意識させることで、授業に見通しを持たせ、積極的に取り組ませることができると考えた。

③ 学習課題の設定

場面ごとに、学習課題を与え、授業に入る前に生徒にまとめをさせた。作品内容をあらかじめ読み取るためと授業展開の道筋を意識させることによって積極性を引き出すためである。課題の大部分は、読み取りノートにまとめさせ、利用しながら授業を進めた。

④ 読み取りノート

「読み取りノート」は「まとめの根拠にした文中の語句・文」と「まとめ」、さらに「まとめ（修正）・気付き」の欄からなる。「まとめの根拠にした文中の語句・文」の欄は、徹底して文章に立ち向かわせるために設けたものである。「まとめ（修正）・気付き」の欄は、主体的読みを促すために設けた。そこに書くことを求めることで、「他の意見を参考にして、自分の考えをより確かなものにする」という「学習目標」の「3」を達成することをねら

いとした。

⑤ 日記・手紙

「一」で述べたように、「日記」を作品を豊かに想像させる読みの手段と考えた。作品を読み進めながら、文中の二箇所で「菊川の日記」を書くことを試みた。また、まとめとして「菊川兵長への手紙」を書かせた。手紙を書く場合、自分の思いを述べる相手として菊川の像を思い浮かべる。手紙を書くことで、作品は豊かに想像されると考えた。

⑥ 板書

高等学校の授業では、板書に十分な注意が払われていないように思える。しかし、板書は、授業構想と密接にかかわりあうものであろう。この授業では、問題を明らかにし、生徒の理解を確かなものにするために、板書を特に注意し心がけた。

四、授業計画と展開

① 計画

「二」の「②」で示した「授業のねらい」を基に、次の学習目標を立て（学習目標の1、2、3は生徒に明示した。）、概ね以下に示す授業計画で授業を進めた。

◇学習目標

1、文章を丁寧に読み、情景や出来事、登場人物の心情などをありありと想像する。

2、文章表現に基づいて、考えを深めたり、意見を述べたりする。

3、他の意見を参考にして、自分の考えをより確かなものにする。

4、1、2、3を通して、作品に立ち向かい、読み深めることで平和を希求する心情を養う。

◇授業計画

導入・一場面 ― 二時間　五場面 ―― 二時間
二場面 ―― 一時間　六場面 ―― 二時間
三場面 ―― 三時間　七場面・まとめ ― 二時間
四場面 ―― 二時間
（学習課題・読み取りノート・日記・手紙と感想文に取り組む時間も含む）

② 対象・時期

対象―三年文系三クラス（各四七名）　時期―二学期後半

③ 具体的展開

次に、授業の具体的展開例を、四場面について、学習課題と共に示すことにする。

〔学習課題プリント〕

草原の敵 ③

（　）組（　）番　氏名（　　）

学習課題

◇次の事柄をまとめなさい。

（四場面）

1、菊川は少年兵周を刺殺することを、自分にどのように納得させたか。

2、松原准尉は刺殺をどう思っているか。

3、「菊川は、自分が周少年ともども、どうにも逃げられぬ立場にあるのを感じた」（No.10）とあるが、なにが、菊川と周少年を逃げられなくしているのか。

4、菊川が部落民に「顔向けできない」（No.10）と感じたのはなぜか。

板書	発問・留意事項
（四場面） 周の刺殺 松原准尉 ・刺殺は技術 ・不満や反感を晴らすためのもの	↑四場面はどのような場面か ↑松原准尉は周の刺殺をどう思っているか。
菊川の刺殺の合理化 ・人間ではない 敵＝物体＝藁人形 ・憎い敵 ・軍人＝敵を殺せなくてどうする ・嬲り殺しより一突に殺すのが慈悲	↑菊川は刺殺を自分にどのように納得させたのか。
↔本心 周は同年代の人間 殺したくない	↑本心ではどう思っているのか
逃げられぬ立場 ・松原准尉の命令 ・上官の権力 ・軍隊の機構 ・戦争 ・（菊川のプライド） 顔向けできぬ思い ・無抵抗な捕虜 ・年少者	↑なに（どういう力）が逃げられなくしているのか。 ☆個人の思いを縛る力を考えさせ、軍隊、戦争の非人間性に気付かせる。 ↑顔向けできぬと感じたのはなぜか。

五、読み取りノート

省略。〔参考資料〕参照。

六、生徒の反応

① 日記

「豊かに想像させる読み」の手段として、授業展開の途中で二度、「菊川の日記」を書かせた。「『菊川の日記』1」は、実敵刺殺の場面とその後の東洋平和への疑問、戦車戦への憧れを描いた、四・五場面が中心である。ソ連参戦にともない現れたソ連戦車隊を前に、菊川たちが玉砕覚悟で迎撃体制を取る六場面の、「赤くとけるような夕陽が、また草原の果てに沈んだ。涼しい風が吹き渡って来る。／菊川は、一週間前の夕べを思い出した。あのとき菊川は、少年兵周が二度と夕日を見るこ／とのできぬのをあわれんだが、それがもう自分の身に迫っている。」という、原文でわずか三行を中心に書かせたのが、「『菊川の日記』2」である。次に、その例を示す。

◇「菊川の日記」2

ああ、なんてきれいな夕陽なのだろうか。
私は、日本で今まで、こんな美しい夕陽を見たことがあっただろうか。私は、むしょうにこの夕陽をすべての人に見せてやりたくなった。敵であろうと、誰であろうと。
私は、周のことを考えると、自分という悪魔が私の心臓を一握りにして、私の心臓を握りつぶそうとしているような痛みが走った。王愛花に言われた「東洋鬼」という言葉が私の脳裏によみがえり私の胸をもっとしめつけた。
今、私は、少年兵周と同じ状況にいる。どうにも逃げられぬ立場なのだ。「少年兵周の事をあわれんでいる時ではないのだ。」と私の中の軍人魂が私を我にもどした。私は、これから負けをわかりきった戦いにいどもうとしている。普通ならとてもこわくて戦えないだろうか。逃げたくなるだろう。だが、私は、戦う。自分の「東洋平和」のためという真念のために。たとえそれが、誤っていても。私の今までの生き方が否定されるのがこわいからだ。私の生き方をつらぬくために戦うのだ。
（男）（傍線引用者）

傍線部は、本文に書かれていない、生徒の創造した部分である。死を前にした菊川の目に映る夕陽の美しさ、思い出される周の死、後悔、激しい痛み、死を前にしての思い、揺れを、本文のわずか三行からよく描き出している。

描かれた菊川は内省的である。死を前に、逃げず戦うことを「真念のため」と言いながら、その奥に「今までの生き方が否定されるのがこわい」という思いがあるのを見る。そして、「生き方をつらぬくために戦う」と思いの真情を述べるのである。この生徒の「菊川の日記」を読むとき、この「内省」に、「『東洋平和』のためという真念」を相対化しようとする、この生徒の思いを読

み取ることができる。

生徒は、死を前にした菊川の心情をよく想像し日記に書き表した。像は言葉に連れ立ち現れる。像を浮かべることはその像を生きることである。死を前にした菊川の内面を生きることで、私達はその死の空しさをより深く実感するのである。

② まとめ

授業の最後のまとめとして、感想「『草原の敵』を読んで」と「菊川兵長への手紙」のうち一つを選ばせて書かせた。次に後者の例を示す。

◇「菊川兵長への手紙」

菊川兵長さん、あなたは戦争でいさぎよく死ねて本望でしたか？あなたは最後まで東洋平和のため、お国のためと思って命を惜しまず、そして捧げましたね。当時はみんなそんなふうにして兵士になった人も、その家族の人も戦争で死んでいくのが名誉だと、誰もが口を揃えて言ったのですね。いいえ、言わなくてはならなかったのですね。あなたは今も、それでよかったと思っていますか？自分はまちがっていなかったと思いますか？

考えてみて下さい。あなたも少し疑問に感じていたでしょう。「東洋平和」という言葉を。「平和」とは一体何でしょうか？あなたは自分たちがこの「平和」のために、本当の意味での「平和」のために戦ったのだと言えますか。たくさんの人が死んで行きましたね。あなたのように、兵士として死のうと決めてそして死んでいった人はまだ救われると思います。だけど、何の罪もない子供達や一般の人々も同じように戦争にまきこまれ、大くの人々が死んでいったのです。彼らは、死を望んでいたでしょうか。普通の人ならば、たとえどんな時代であろうと〝生きたい〟と思うのが当然ではありませんか。

あなたは戦争に対して、憧れのようなものを抱いていたように思われますが、戦争というのは真実を無理にこじまげて頑固にまでその誤りを正しいとした「平和」という仮面を被ったその正体は人を傷つけあうことです。殺さなければ戦争には勝てませんね。お互いにそう思いながら殺し合うのでしょう。

人の命なんて、はかないものです。しかしそれは、とてつもなく重いものです。あなたにもそれはわかっていることと思いますが……。あなたも心を傷めたはずです。覚えているでしょう。少年兵周のことを。そう、あなたが殺した少年兵です。いくら戦争とはいえ、人を殺したことに違いありませんね。だけどやはり罪を感じた。心のある人間ならば当然ですね。あなたも苦しんだでしょう。そうして死んでいきましたね。

あなたは生きたくないと言いましたが、はたしてそれは心の底からの偽りのない気持ちだったでしょうか。あなたは最後まで兵士でした。兵士として死んでいきました。しかし、一個としての人間と考えたとき、あなたは生きたかったはずです。また、戦争という時代でなければ、そんなことは考えなかったはずです。あなたは、自分は兵士であると言いきかせ、自分は戦争で死ぬものと決めていた。だけど、本当は、心の底では、生

きたいと願っていたのではありませんか。
戦争は、あらゆるものを奪い、形を変えてしまいます。人間も変えてしまいます。戦争というものは恐ろしいものです。どうかあなたも戦争に反対して下さい。今、こうして私達が、生きていられるのは、あなたたちのような多くの犠牲を払った上でのことですが、あなたたちの犠牲は、決して無駄にはしないつもりです。戦争というのは、二度とおこしてはならないのです。
最後に安らかにお眠り下さい。(女)(傍線引用者)

この生徒は、「菊川への手紙」という虚構を通して思いを述べる。せつせつと語りかけ、訴える。そうすることで自分の感じ考えたことを確かめようとする。生徒が語りかけるのは、周の刺殺に「心を傷めた」、「心のある人間」としての菊川である。そのような菊川に向かって、戦争に憧れを抱くことの愚かしさ、国のため、東洋平和のために命を惜しまず戦うことの愚かしさを一つ一つ語りかける。「最後まで兵士」であり、「兵士として死んでい」った菊川の、「一個としての人間」に向かって話しかけるのである。非難しようとしてではない。逆に、「心のある人間」としての菊川を信じ、話しかけることで、心を圧し潰し兵士として死なざるをえなかった菊川の姿を浮かび上がらせる。「あなたは、自分は兵士であると言い聞かせ、自分は戦争で死ぬものと決めていた。」と言うことばには、菊川をそのように追い込んだもの－戦争（戦争体制）をこそ非とする思いが込められている。

戦争（戦争体制）は「心のある人間」としての菊川を、東洋平和のため、お国のために惜しまず命を捧げる「兵士」に変え、人々に戦死を名誉だと言わせた。その結果として、「何の罪もない子供達や一般の人々も同じように戦争に巻き込まれ、大くの人々が死んでいった」のである。生徒は、戦争について、「戦争は、あらゆるものを奪い、形を変えてしまいます。人間をも変えてしまいます。」と、的確に捕らえる。「戦争というのは恐ろしいものです。」と言う生徒のことばは、そのような具体的な読みに基づいたことばであろう。

この生徒は、「菊川兵長への手紙」という虚構の方法を選び、菊川に手紙で語りかけることで、読み取った思いを私達の胸にしみいるように表現し得ている。

七　授業についての生徒の自己評価

「草原の敵」の授業を終えた後、次の項目で自己評価させた。

「草原の敵」学習目標自己評価
（　）組（　）番　氏名（　　）
1、文章を丁寧に読み、情景や出来事、登場人物の心情などを想像しながら読むことができたか。（　）
2、文章表現に基づいて、考えを深めたり、意見を述べたりすることができたか。（　）

3、他の意見を参考にして、自分の考えを検討し、より確かなものにすることができたか。(　　)
よくできた－A、まあまあできた－B　、
あまりできなかった－C、ほとんどできなかった－D

結果は次のとおりである。

	A（%）	B（%）	C（%）	D（%）
1	四五、二	四七、四	六、七	〇、七
2	二〇、七	五七、八	二〇、〇	一、四
3	三〇、四	五四、一	一一、一	四、四

（回答数－一三五名）

「1」は、A、B合わせると九〇%を越えている。これは、まず、生徒の興味・関心を引き付ける作品自体の力によると考えるべきであろう。しかし、同時に、作品の文学としての力を授業に生かし、その読みに生徒を積極的に参加させる、「三」で述べた授業の工夫もその要因になっていると考えたい。

「2」は、A、B合わせると七八、五%と、おおむねできたと答えている。しかし、この数値は「1」、「3」と比べるとやや低く、Cと答えたものが二〇、〇%と高くなっている。これは、質問項目後半の「意見を述べたりすることができたか。」に対する自己評価が低かったせいではないかと考える。

「3」は、A、B合わせると八四、五%となっている。生徒は、意見発表をよく受け止め、それを生かしたと意識している。ただ、C、Dと答えたものが合わせて一五、五%あることも注意を要しよう。

この自己評価によると、多くの生徒が、①文章を丁寧に読み、表現に基づいて考えを深め、意見をもつことができた、②情景や出来事、登場人物の心情を想像しながら読むことができた、③他の意見を参考にし、自分の考えをより確かなものにすることができた、と考えているといってよいだろう。

おわりに―反省と課題

ここで「ねらい」と「工夫」の達成と有効性について考察することにする。

「ア、生徒の積極的参加を促す授業」は、おおむね達成されたと考えられる。生徒は、「七」の「自己評価」でみたように、多くが積極的に読み、よく想像し、他の意見を聞くことで考えを深め、確かにしたと考えている。それは、生徒の残した「読み取りノート」・「日記」・「感想」・「手紙」にもみてとれることである。また、授業の手ごたえとしても実感できたことであった。

その理由として、まず教材の力が考えられる。それとともに、作品の力を生かすために「一読総合法を取り入れた読み」を導入したことも理由として挙げられよう。「学習目標の明示」・「学習課題の設定」も授業の方向と流れとを捕らえ、内容をつかむのに

有効に働いたと考えられる。「読み取りノート」は、直感による誤解を排し、文章に立ち向かうことで読みを深めるのに役立ったであろう。また、授業時の発表をも容易にしたと考えられる。「板書」も、問題点を明らかにし、理解を容易にしたと思われる。しかし、これらの工夫の有効性は、授業者の実感の域を出ていない。さらに実証的に考察することが必要であろう。「読み取りノート」については、作品の理解を容易にするという声の一方で、「めんどうだ」という声もあった。授業の目標に従って、今後、適宜改善することが望まれる。

「イ、情景や心情を豊かに想像させることを目指す授業の展開」のために、「菊川の日記」を導入した。すでに見たように、生徒は、「日記」という虚構の方法に促されて、菊川の置かれた状況と内面をよく描き出している。「日記」は、像を豊かに広げ、深め、その人物を生きる読み手に、作品の世界を感得させる有効な方法と言える。

「ウ、戦争の残虐性・暴力性を実感させ、平和を希求する心情を育てること」については、生徒の、「菊川兵長への手紙」、「感想」を読む限り、一定の成果を収めたと考えられる。しかし、残虐性・暴力性の実感と平和を希求する心情との間には、生徒によってはなお距離が有ると思われる。それを埋めるための発展学習が必要であろう。

全体的に見て、三つの「ねらい」は、ほぼ達成されたと考える。また、「ねらい」を達成するための六つの「工夫」は、その有効性が今後に検討されなければならないものもあるが、おおむね有効に働いたと考える。しかし、「ねらい」と「工夫」という観点からの考察を離れて、授業の全体を顧みると、いくつかの課題が考えられる。

一つは、生徒の主体的参加を（「促す」のではなく）取り入れた授業である。「草原の敵」の授業は授業者主導であった。今後に、生徒の主体的参加の場を授業に保証し、生徒主導型の授業を行うことも試みられてよいだろう。また、今回の授業は「草原の敵」のみで終わったが、「ウ」の反省とも重なるが、一つの問題を多様な観点から捕らえた教材を並列的に、あるいは縦列的に関連付けて授業が試みられてもよい。一つの教材から、読書指導という形での発展学習を試みることもできる。さらに、生徒に読みの方法を身につけさせる授業を試みることも必要であろう。これらを今後の課題とし、さらに実践を深めたい。

☆これは、第三十回　広島大学教育学部国語教育学会（一九八九年十一月四・五日）で口頭発表したものに加筆したものである。

注1、「国語教育研究」三十三号（広島大学教育学部光葉会）
注2、大江健三郎氏「新しい文学のために」（岩波新書　P、三十二、P、三十五）
注3、磯貝英夫先生「文学受容の主体性の問題」（「文学教育基本論文集3　西郷竹彦・浜本純逸・足立悦男編　明治図書　P、三十二、P、三十六）
注4、浮橋康彦先生「読んで書き、全員が発言する『小説』の学

習ー小川国夫『物と心』の研究授業ー」(「国語教育研究」第二十六号　中　広島大学教育学部光葉会　P．九十七)

注5、大森荘蔵氏「言い現し、立ち現れ」(「岩波講座　文学1　文学表現はどのような行為か」岩波書店　P．二三一)

注6、大槻和夫先生「戦争児童文学による平和教育をすすめるために」(「文学教育基本論文集3　西郷竹彦・浜本純逸・足立悦男編　明治図書　P．一九八～P．二〇〇)

注7、「草原の敵」の教材化に関しては、拙稿「『草原の敵』の教材化」(「月刊国語教育」一九八九年　六月号　P、一一二)を参照いただきたい。

(大阪府立和泉高等学校教諭)

〔参考資料〕（三場面までを示す）「草原の敵」読み取りノート　（　）組（　）番　氏名（M・A）

設問		まとめの根拠にした文中の語句・文	まとめ	まとめ（修正）・気付き
(一)	1	現地招集で送られてきた親子ほども年のちがう二人の二等兵。わずか二十人の守備隊。学徒兵・九九式銃※	追いつめられた状態　戦争の末期	太平洋戦争末期（一九四五年八月）　ア※学徒出陣S18　※鍛える＝しごく
	4	・・・松原准尉は繰り上げ入営の見習士官。こちらがいまいましそうに…… ・・・反感をもつ…ふざけた言い方だった。許せない・無能な気になった…… ・・菊川は長谷部に嫉妬を感じた。それが怒りに変わって不公平だという気がしてくる。	松原准尉に反感を抱く菊川兵長。見込みちがい→反感　不公平・嫉妬→反感	イ　不公平→怒り　嫉妬
(二)	1	壊れかけの中うろうろしている森、長谷部に銃を取らせてもふるえるばかりで顔をそむけている。	初めての襲撃におそれている。	不安・動揺・恐怖感
	2	首をあげろうろうろして……敵を一人殺すごとに自分のめざす兵のまなざしが変わっていく…… 自分がそうなってしまったという……優越感に浸る……馬が少しかわいそうな気がする……	敵を殺したおごりや驕り。人を殺すのが馬鹿らしいと。「東洋平和」と思わせられてしまった。	優越感と「東洋平和」を和らげ、納得させて優越感にひたっている。
(三)	1	ア「……ここは海の中に孤立している島みたいなものです。波に洗われていないのが、ふしぎなくらいです。」 イ　中国が大きすぎるんです。	偉大な中国を攻撃する今の日本軍のやり方が、けっきょく受け入れられないと思わず不安に思う。	自分がなぜ反論したか分からなくなってしまう。そのまま考えていくとこういう行為に自信をなくしてしまうような姿
	2	来るべき戦車はなかった。一台だけあったが……はりぼてのように回収されていた。菊川は少年戦車兵学校に憧れていた。	戦車一台にも事欠くような状態。番兵では戦うことはできないと思い知らされた。	戦車兵に憧れて入隊したのに実際の部隊では戦車もない惨めな姿。人間的に対しない非人間的な姿
	3	ア　不満だ。こいつにおまえと同年の初年兵を二人くれてやる。実敵刺殺　少年兵　イ　見せしめに…… 釈放……本隊へ後送。「拷問はこちらでもやる。そんなことも……」	周りの人間と同じように自分を見て憎しみを込めて注意を晴らしてしまう。	人間的に助けたいわそうだ。
	4	捕虜に食わせる余分な食料はない。この部落には捕虜を殺す兵士が少ないので、精神力が必要だ。敵を刺殺した新兵は、一人前の兵長になるはず。	同じ年代の少年を殺すと自分の兵としてのプライドを保つことができた。	周りを捕らえたことを後悔し菊川に対するいやがらせ
	5	こいつは自分の身の危険を感じていた。『殺せ』と言われても、捕虜の命を受けとめたらいいのか分からず迷っていた。生きたいと。	森の捕虜の刺殺を命じられ、初年兵の訓練として殺すことになり、兵長として反論できない立場に不満と恥を感じて……	少年兵に対する不満、実敵刺殺＝なぶり殺し
	6	人間を一人殺して、人を殺すことにためらいを受けず、一人の兵長だ。	本当の准尉は心の中で捕虜を殺すことを決心していた。命令だから仕方なく変えられた。	
	7	狂ったように頑固になる。隊長である。「人間一人この手で殺せないで、何が兵長だ。」	兵長として上官の准尉に言われ、突き動かされ、プライドを傷つけられたのである。	人を殺すには強い精神力、肝っ玉をもたねばならない。准尉にそう言われ怒りを抑え、兵長としてのプライドを思わせられた。